

ときめき通学電車



広田弦一

目次

満員電車	1
草野球	3
渡せなかったプレゼント	6
招かれたお友達	10
掛かって来た電話	14
噂が広まる	18
失意	22
薄明かり	24
事の終わり	28
エピローグ	35

満員電車

1 満員電車

「電車が入ります。気をつけてください！」

駅員の声が、ホームの中に響き渡った。

すると、電車がホームに入って来た。

「もう来ちゃったの」

めぐみは残念そうに呟いた。

電車の扉が開いた。電車の中に多くの人が吸い込まれて行く。

「あの人、行っちゃう」

めぐみは電車に乗ろうとせずに、ある人の後姿を見詰めた。

「オッス！」

〈ドキッ！〉

めぐみは振り返る。

「何だ、花子か。驚かさないで！」

「何をボケッとしてるの。電車、行っちゃうよ！」

「あら、本当だ！」

めぐみと花子は、電車に駆け込む。

電車は超満員！ 身動き出来ない位だ！

やがて、駅に着いた。

乗客が一気に電車から吐き出される。めぐみと花子は、押され、ホームに出てしまった。

「何なのよ！ あの中年のおじさん！ わざとぶつかって来るんだから！」

花子は怒っている。

「仕方ないよ。これだけの人が乗ってるんだから！」

めぐみはもっともなことを言った。

「さあ、乗らなくちゃ」

二人は再び電車に乗り込んだ。

でも、かなりの人が降りたので、電車は大分空いた。

「いた、いた……。あの人が！」

めぐみは、あの人を眺めていた。憧れの思いを込めて……。

「めぐみ、何を見てるの？」

花子が訊いた。
「何でもないよ」
めぐみは慌てて視線を逸らした。

「ちくしょう！ あの電車、何とかならないの？ 毎日、毎日、おしくらまんじゅうじゃ、学校に来るのも、楽じゃないよ」
と、花子は不満そうに言った。
「仕方ないよ。皆、我慢してるんだから」
「おはよう！」

と、二人を足早で追い越して行ったのは、中野亜沙子だった。亜沙子は、ショートカットの髪がよく似合っていた。
「中野さんが、羨ましいな」
花子は、亜沙子の後ろ姿を眼にしなが、溜息混じりに言った。
「そうね。中野さんは、電車地獄なんて、関係ないからね」
中野亜沙子の家は、椿学園から遠くない閑静な住宅地にあったので、歩いて通学している。それが、花子には羨ましいのだ。

今日の最初の授業が始まった。めぐみの苦手な数学だ。微分、積分。こんなの、分からないよ。めぐみは先生の話も上の空。頭の中は、あの人のことで一杯。

あの人の名前、知りたいな。話をしてみたいな。一緒に歩いてみたいな。湖があって、白樺林があって、爽やかな秋風が吹いて、小鳥が囀って。フフフ……。
「内海さん！ その答を出してください！」

キングコングこと、数学の教師、竹之内勘助に、めぐみは心地良い空想をぶち破られた。

「はい！ 先生、何ですか！」
そのめぐみの言葉に、クラスの中は、笑いの渦が沸き起こった。
「何か変なことを言いましたか、私……」

めぐみは顔を真っ赤にさせては、頭を掻いた。
「もういい！ 今度答えられなかったら、運動場一周だぞ！」

出た！ キングコングの得意技だ。数学の問題が解けなければ、運動場一周しなければならない。か弱い女子高生たちは、キングコングにやられ放し。数学の授業というより、体育の授業みたい。か弱い乙女たちは、一体何回運動場を回らされたやら……。

草野球

2 草野球

今日は日曜日だ。勿論学校は休みだ。また、今日は真っ青の青空が広がってる上天気だ。

「今日はいい日ね」

ママが言った。

「本当だ。何処かに行きたいな」

「予定、あるの？」

「何もないんだ。こんな日に、テニスとか山登りしたら、気持ちいいだろな」

ちょっぴり、スポーツ好きのめぐみは、残念そう。

「近くの公園で草野球の試合があるのよ。高校生も参加してるそうだから、めぐみ、あんたも見物に行ったら」

「野球か。野球はあまり興味がないんだ」

「そう。だったら、無理にとは言わないけど」

ママは冷蔵庫からミルクを取り出し、カップに注いではめぐみに渡した。

「今朝はママの手作りのサンドイッチよ」

「わあ！ 美味しそう！」

めぐみは、サンドイッチを口にもっていって、ぱくつき、そして、ミルクを一気に飲み込んだ。

「うっ！」

めぐみは、むせてしまった。

「馬鹿ね。一気にミルクを飲むからよ」

ママは笑った。

「草野球か……」

結局、めぐみは草野球を見に行くことになった。

パパに、

「ドライブに連れて行ってよ」

と言ったが、

「パパは、仕事で忙しいんだ。休みの日くらい、ゆっくりと寝かせてくれよ」

と言っでは、午前中は、ご睡眠の時間。花子に電話しても、

「ごめんね。今日、予定があるんだ」

と、言われてしまった。
仕方なく、一人で草野球観戦となってしまったのだ。
でも、その公園、めぐみの家から遠くないし、公園の中に噴水や花壇があったりして、結構リラックス出来る所。
青空の下で、ベンチに座って、文庫本でも読んでみるか。
ということで、青空の下で、野球観戦と読書でもしてみるかということになったのだ。

「セーフ！」

と、アンパイアの声が聞こえた。ヘッドスライディングだ。パチパチと、拍手が聞こえた。

「やってるな」

めぐみは、選手たちに眼をやった。
「よし！ 野球観戦でもしてみるか」
めぐみは、グラウンドの傍らの芝生に腰を下ろした。
日曜日なので、結構見物者は多い。特に高校生が多いようだが、家族連れの姿もちらほら。

一球ごとに、高校生たちは、声援を送る。
全く騒々しく、めぐみはやっぱり読書にしようかと思ったその時である。

「三番、サード柴田君」

と、アナウンスされた。
「柴田！ 頑張れ！ かっ飛ばせ！」

という声援が飛んだ。
めぐみはその声に釣られ、柴田という選手を見た。
めぐみは<ハッ！>とした。
あの人だ！ 素敵な人……。私の胸をときめかせたあの人だ！ めぐみは、固唾を呑んだ。

「キーン」

快音が鳴った。
ボールは弧を描いて、外野に飛んで行く。
柴田は走った。そして、三塁に滑り込んだ。

「セーフ！」

三塁打だ。柴田はユニホームに付いた泥を払った。
結局、めぐみは最後まで野球観戦をすることにした。
あの人、柴田君っていうんだ！
ユニホーム姿がよく似合う。
柴田君、とても愉しそうだ。元気一杯に打ち、走り、守る！ カッコいいし、柴田君って、スポーツマンなんだ！
めぐみは、もう柴田君に夢中になってしまった。野球なんて、興味ないの。私、柴田君を見てるだけで、それだけで……。

その時、ボールが私の近くに飛んで来た。
ファウルだ。
私はボールを拾った。三塁手が私に近付いて来る。
「ボール、僕の方に投げてくれますか」
「ボール？　アッ！　これね！」
「エイ！」
と、めぐみはボールを投げた。
ボールは三塁手のグローブに収まった。
「ありがとう」
三塁手はめぐみに軽く頭を下げた。
「どういたしまして」
これが、めぐみが柴田君と交わした最初の言葉だった。

渡せなかったプレゼント

3 渡せなかったプレゼント

今日は中間テストだ。めぐみは、今日は午前中で下校だ。

「めぐみ、帰ろうか」

と、花子。

「うん」

めぐみは花子と駅まで一緒に歩く。

「花子、悪いけど、先に帰って」

「いいよ」

花子が駅舎に消えて行った。

東山学園。それが、柴田君の高校だった。めぐみの椿学園とは駅を挟んで反対側に位置していた。

めぐみは、東山学園を目指した。

めぐみはあの日、野球観戦をした日に、百貨店に行っては、ネクタイを買った。店員さんに、

「贈り物なの。リボンを付けてね」

と言った。

めぐみは、その贈り物を鞆の中に入れていた。柴田君に渡す為に……。

毎朝、柴田君は、決まった時刻に電車に乗って来る。私もその電車に乗る。

私は柴田君のこと、忘れたことはない。でも、柴田君は私のことを知らない。

私、柴田君を遠くで見詰めてるだけなの。私、勇気がないの。

傍らまで行って、「おはよう」と言えばいい。

でも、柴田君は私のことを知らない。だから、「この人、誰？」と思われるかもしれない。

でも、私、柴田君に夢中。その私の気持ち、分かって欲しい。

東山学園の校門が見えた。

めぐみの勘は当たった。東山学園も、椿学園と同じく、中間テストだ。

校門から、男の子たちが、ぞろぞろと出て来た。めぐみは、校門近くの銀杏の樹の下で立ち竦んでいた。

東山学園の男の子たち、めぐみの前を通り過ぎて行く。めぐみの方をちらっと見ては視線を逸らして行く。当たり前だ。東山学園で私のことを知ってる人なんて、いないのだから。

東山学園は、男子高だ。椿学園は、女子高だ。めぐみは中学も女子高だった。それで、めぐみは、男の子の知り合いは、殆どいない。

時間は、刻一刻と経って行く。めぐみには、時間がとても早く過ぎて行くように感じられた。

来た！ 遂に柴田君が校門から出て来た！

四、五人の男の子たちと連れ立って、ブレザーがとてもよく似合っている。東山学園の制服って、とても素敵だ。めぐみは、今までにそう思ったことはなかった。柴田君を見るまで……。

柴田君がめぐみの傍らを通り過ぎようとした。

「柴田君！」

そう言いたかった。

でも、出来る筈はない。

「アレッ」

一瞬、柴田君はめぐみを見て、立ち止まった。

「どうしたんだ、柴田？」

周りの男の子が言った。

「うん」

柴田君がめぐみを見詰めた。

〈いやだ……、恥ずかしい〉

めぐみは、顔を赤くした。

「悪いけど、先に帰ってくれよ」

柴田君は男の子たちに言った。

男の子たちは、去って行った。

柴田君はめぐみに近付いては、

「君は……」

柴田君はそう言った。が、めぐみは何も言えない。顔を赤くしてるだけだ。

「あの時の……」

「あの時って？」

めぐみは言った。

「野球のグラウンドにいたね、君は？」

「ええ。そうなの」

〈やった！ 柴田君と言葉を交わした！〉

めぐみは思わず破顔した。

柴田君はめぐみの制服を見て、

「君、椿学園だね」

「そうなの」

「椿学園って、駅の向こうじゃん！ こんな所で、何してるの？」

〈そんなこと、訊かないで！ 鈍い人ね！ 私の気持ち、分かってよ！〉

「別に……」

めぐみは答えた。

「そう。じゃ、駅まで一緒に歩こうか」

「うん！」

めぐみは、柴田君と共に歩き出した。

「椿学園も今日、中間テストかい？」

「そうよ。今日は数学と物理。苦手の科目ばかり。随分と疲れちゃったわ」

「ふーん。じゃ、僕と同じだ。僕も理系が弱くて、英語とか国語が得意なんだ。君は何が得意なの？」

「国語かな」

そう言ったが、めぐみの顔は赤くなっていた。実のところ、得意な学科って何もないのだから。

「国語か。それも同じだな」

と言っは、柴田は笑った。

「あの……、名前、教えてもらえませんか？」

めぐみは訊いた。

「柴田っていうんだ」

「姓は知ってるんです。この前、公園での野球の試合でアナウンスされるのを聞いて、覚えちゃったんです。名前の方を知りたいんです。何というんですか？」

「柴田良平というんだ」

「良平君か」

「君は何というんだ？」

「私、内海めぐみです」

「めぐみちゃんか。可愛い名前なんだな」

「皆にそう言われるんです」

と、めぐみはちょっぴり、自慢した。

「君のこと、何処かで見たような気がするんだけど」

良平は、思い出そうとした。

〈良平君は、私が毎日駅で、憧れの気持ちを込めて見詰めているのを知らないと思う〉

「よく似てる人なんて、いくらでもいるわ」

めぐみはさりげなく言った。

〈そうだよ！ 私と柴田君との出会いは、あの草野球の日から始まったんだ。二人の出発点は！〉

駅が見えて来た。

「また、会ってくれるかい？」

「勿論よ！」

めぐみは答えた。その言葉を待ってたんだから！

「もしよければ、めぐみちゃんちの電話番号をおしえてくれないかな」

「いいよ」

と言っは、自宅の電話番号を言った。

「今度、めぐみちゃんちに電話するよ」

良平は、手帳にめぐみの家の電話番号を書き留めたのだ。

「めぐみ、嬉しそうだね。何かいいこと、あったの？」

ママが訊いた。

「ううん」

ママに嘘ついた。今日は本当はとてもいいこと、あったんだ。柴田良平君とお喋りして……。今度電話してくれるって、約束までしてくれたんだ。いつ、してくれるのかな。待ち遠しいな。デートに誘われたら、どうしよう。めぐみの胸は、ときめいた。

「二階に行くよ」

めぐみは、ママに言っては、二階のめぐみの部屋に行った。

机の上に、良平に渡すつもりだった小箱を置いた。結局、渡せなかったけど、めぐみの気持ちが通じたんだ。〈ネクタイさん！ あんたには、もう用はないのよ！〉

めぐみは、ネクタイが入った小箱を引出しに仕舞い込んだ。

招かれたお友達

4 招かれたお友達

「大きな家が多過ぎるよ！」

花子は眼を丸くした。この街に来るのは初めてじゃないが、椿学園からほど遠くないこの街は、ヨーロッパの都市をモデルに設計された屈指の高級住宅地。何度来ても、眼を丸くするのだ。

「こんな所に住んでる人って、羨ましいよ」

花子は何度そう思ったことか。

でも、今日はその街のお友達のお家に、パーティに招待されてるんだ。めぐみと一緒に。

そう！ 永合明子さんの誕生パーティに！

「確か、この辺よ」

めぐみは、手にした地図を元に、辺りをきょろきょろ見渡した。花子もめぐみのように、辺りに眼をやった。

「見付けたぞ！」

花子が、叫んだ。

遂にあった！ 永合明子のお家が！ 高い塀に囲まれた大きなお家だ。

めぐみはインターホンを押した。すると、程なく明子の声が聞こえた。

「入ってよ。門は開いてるから」

という声が。

広い芝生の庭があった。テーブルの上に、お料理が並べられていた。

「めぐみ、遅いよ」

「花子、こっちにおいでよ」

明子に招待された椿学園生たちが、めぐみと花子を手招きした。

「これで、みんな揃ったわ。めぐみと花子、そこの椅子に座ってよ」

明子は、満足そうに言った。

招待されてるお友達の数、十人程。皆、椿学園の顔見知りばかり。

〈おや？ あの人、誰？ 〉

テーブルの端の方に座っているサラリーマン風の紺のブレザーを着てる見慣れない男。

「あの人、誰よ」

すかさず、花子は隣に座ってる沢口すみれに訊いた。

「あの人、明子のフィアンセらしいわ」

「へえ！　驚き！」

花子は眼を丸くした。そして、めぐみに耳打ちした。

「あそこにいる男、明子のフィアンセらしいわ」

めぐみは、その男を見た。

確かに明子のフィアンセに相応しく、お金持ちのおぼちゃん風に見える。しかし、その反面、何となく頼りなさそうにも見える。

「驚いたわ。私なんて、ボーイフレンドもないのに……」

めぐみは、ちょっぴり不満だった。

「みなさん！　今日は私の十八歳の誕生パーティに集まっていただき、ありがとう。飲んだり、騒いだり、歌ったりして、楽しい時間を過ごしてね」

いつの間にか、白いドレスに着替えていた明子が、挨拶した。

「明子、あそこの男、紹介してよ」

誰かが言った。

「あっ、そうだったわ」

明子が、照れ笑いした。

「西城君、挨拶してくださる」

明子は言った。

すると、紺のブレザーを着た男が立ち上がり、明子の横に並んだ。

「俺、西城弘美っていうんだ。弘美って、女みtainな名前だけど、れっきとした男で一す！」

爆笑が起こった。

「確かに、女みtainな名前ね」

と、誰かが言ったので、再び爆笑が起こった。

〈この人、見掛けよらず、面白い人〉

めぐみは思った。

「実は、今日の誕生日に、重大な発表をします」

と、明子は些か顔を強張らせた。

「何の話？」

「勿体振らずに、早く話してよ」

という声が、飛び交う。

すると、明子は眼を大きく見開き、

「実は私、この西城君と婚約しました！」

すると、

「おめでとう！」

「羨ましいわ！」

「この幸せ者！」

女生徒たちの口から、祝言が飛び交う。

程なく、紙吹雪が明子と西城君の頭上に舞った。紙テープが滝のように流れ落ちた。シャンパンの栓がパンという音を立てて飛び散った。

「では、明子と西城さんの未来を祝福して乾杯！」

「乾杯！」

「西城明子さん！」

めぐみは、シャンパンを口に流し込んだが、女生徒たちから祝言を浴びせられた西城さんと明子をうっとりとした眼で眺めるばかりだ。

〈私もいつか、明子のように、婚約者を連れて皆に祝福してもらうんだ。そう！ あの良平君を相棒にして……〉

明子の誕生パーティは、打って変わって、明子の婚約発表パーティに早変わり。

「二人は、どうして知り合ったの？」

とか、

「デートは何処に行ったの？」

とか、中には、

「キスはしたの？ 何処まで進んでるの？」

という質問責めに、明子は照れ笑い。

明子に代わって質問に答えたのが、西城さん。

「どうして知り合ったかって。親同士の紹介さ。それだけだよ」

と、西城がぶすっとした口調で言った。

すると、その途端、静まり返った。

めぐみの顔からも、ちょっぴり笑顔が消えた。この二人、どんな出会いがあったのかな。街で声を掛けられたとか、クラブ活動で知り合ったとか、何か素敵なロマンスがあったのに違いない。招待された誰もが、そう思ったに違いない。それが、親同士の紹介だなんて……。でも、それだって、素敵な出会いかもしれない……。

その後、西城の独擅場が続いた。

「俺たちがデートで何処に行ったかって。俺の愛車で有名ビーチまでドライブさ」

「まあ！ 素敵！ それから、どうしたの？」

と、女生徒がからかった。

「どうしたかって？ そりゃ、それからはホテルに行ったさ」

「西城君！ そんなこと、言わないで！」

明子が厳しい口調で言った。その明子の表情は、今までの明子のものとは思えない程、初めて明子が見せる厳しいものであった。

「いいじゃないか！ 俺たち、婚約してるんだぜ！」

と言っては、西城は明子の肩に手を置いた。

すると、明子はそんな西城の手を振り払った。そして、西城の頬に何と平手打ちを喰らわしたのだ。

「ビシ！」

という音が聞こえた。

「あなたって、大嫌い！」

そう言うと、明子は家の中に駆け込んで行った。

「ちえ！ あいつ、何を怒ってるんだ」

西城は、ぶつぶつ言いながら、女生徒たちに挨拶もせず、去って行った。

そんな明子と西城を見て、

「みなさん！ 今日はこちらでお開きにしましょう！」

と、誰かが言った。

「時間が来たことだし……。みなさん、これで帰りましょう」

と、誰かが言った。

みんな、作り笑いしてるように見えた。

「めぐみ、帰ろうよ」

と、花子が言った。

「そうね」

めぐみは、花子に笑って見せた。

後で分かったことだが、西城と明子は、親同士の都合で、婚約させられたそう。西城と明子が結婚すれば、会社の社長同士の親に、メリットがあるというのが、理由だそう。

「明子って、可哀相」

「私、明子の気持ち、分かるよ。好きでもない男と婚約させられるなんて」

「私たち、まだ高校生よ。婚約なんて、まだまだ先の話よ」

「その通りよ、青春を愉しまなくちゃ」

めぐみはこの時、つくづくと思った。お金持ちにも悩みがあるんだと。

掛けて来た電話

5 掛けて来た電話

「はい。内海ですが。めぐみですか。いますが.....。柴田さんですね。少々お待ちください」

「めぐみ。電話よ」

というママの声がした。

めぐみは腰を上げ、

「誰から？」

と訊いた。めぐみはちょっぴり不機嫌だった。今、いいとこだったのよ！ 見ているTVが今、面白いとこなのよ！

「柴田という男の人なの。お友達？」

「柴田.....」

めぐみは、その名前を聞いて、さっと穏やかになった。

ママの手から送受器をひったくると、

「内海ですが」

という甘い声を出したのだった。

「急に誘ったりして悪いな」

と、柴田良平は言った。白地に水色のストライプが入ったシャツとジーパン姿の良平は、まだ幼さを隠しきれない。いつもの制服姿しか見慣れてない所為かもしれない。

めぐみと良平は、めぐみのことをめぐみ、良平のことを良平と呼ぶ位の仲になっていた。

中間テストだった日、めぐみが東山学園の近くで良平を待ち伏せして駅まで一緒に帰った日以来、めぐみは良平といつも電車で顔を合わせ、話をした。

良平は、めぐみを見て、

「あっ！ 君もこの駅だったの？」

と、驚いた様子だったが、めぐみは驚かない。だって、良平を知ったのは、この駅のホームだったのだから。

でも、めぐみは驚いた様を見せた。

「まあ！ 柴田君じゃないの！」

と。

めぐみと良平は、毎朝、同じ電車に乗って、冗談を言ったり、ふざけ合いをしたりして、通学した。

めぐみは椿学園。良平は、東山学園。降りる駅は同じ。

めぐみは、通学時間がとても愉しかった。本来なら、満員電車で揺られ、中年のおじさんたちに挟まれ卑屈な思いをしたものだ。でも、今はその三十分があっという間に過ぎてしまう。楽しい時とか、夢中になってる時は、時間が経つのもあっという間。正に、良平と電車に乗ってる時は、そういう時間かな。

でも、まだ良平とデートしたことはない。早く誘って欲しいな。

めぐみはそう思っていた。

でも、ついにその時が来たのだ。

めぐみは良平と手を繋いで街を歩いていた。

「何処へ行こうか？」

良平は訊いた。

「何処でもいいよ」

私は答えた。

そう。何処でもいいんだ。良平が傍らにいただけで、それだけでいいのよ。

「映画でも見ようか」

「それで、いいよ」

めぐみは答えた。

映画館の中に入った。真中辺りの席が開いていたので、そこに座った。

良平は、観るのに夢中だった。スクリーンを食い入るように見詰めている。でも、めぐみは映画の方は、そっちのけ。良平が夢中になってるのをいいことに、良平の手に私の手をそっと重ねた。

良平は、そんなめぐみのことに気付かない。もう、良平ったら！ 観るのに夢中なんですもの。めぐみのこと、放ったらかしにして！

そして、映画はいつの間にやら終わってしまった。

「面白かった」

良平は言った。

「そうね」

めぐみも言った。でも、映画のことなんて、何も覚えていない。だって、良平が傍らにただで……。それだけで……。

映画館を後にすると、良平は、

「次は何処に行く？」

良平は訊いた。

「そうね……」

めぐみは呟くように言った。

「僕は何処でもいいよ。めぐみが行きたいところで」

「じゃ、マクドナルドにしよう」

正に率直な言葉だ。めぐみは随分とお腹が空いていたのだ。

二人はマクドナルドに入った。そして、早速ハンバーガーを注文し、席についた。

ハンバーガーを手にとると、めぐみは早速かじりついた。

「美味しい！」

と、声に出して言わなかったが、めぐみは食べるのに夢中。そんなめぐみを良平は呆気に取られたような表情で見入っていた。

「やっぱり女の子だな」

と、良平小さな声で言った。

すると、めぐみは食べるのを止め、

「何か言った？」

「やっぱり女の子だと思ったんだよ」

と、良平は笑いながら言った。

「あら、失礼ね。私のこと、男みたいだと思ってたの？」

「そういう意味じゃないよ」

と、良平は笑った。そんな良平は、ストローでコーラを飲み込み、大きく息をついた。

めぐみは綺麗にハンバーガーを平らげた。お腹一杯になって大満足。

「いけない！」

今までおしとやかな女の子を演出してたんだ。でも、ハンバーガーを見て、本領発揮！

野性味溢れる女の子に早変わり。こんな私のことを見て、良平が私のことを嫌いになったら、大変だ！

やがて、二人はマクドナルドを後にした。

「良平！」

めぐみは言った。

「何だよ」

良平は、めぐみを見た。

「私って、ドジでしょ。映画を見た後、マクドナルドに誘い、食べるのに夢中になってしまっ……。私、羽目を外し過ぎてしまったのよ」

「そんなことないよ。でも、本当のめぐみを見た気がするよ」

「やっぱり、そう思ってるの？」

「ああ。でも、悪い印象は持たないよ。それどころか、素敵だと思ったよ」

めぐみは気にしていた。友達とマクドナルドに行った時、めぐみがハンバーガーにかじりつくのを見て、

「めぐみ、気をつけなさいよ。めぐみがハンバーガーにかじりつく様は、男勝りよ。デートの時に注意なさいよ。めぐみが食べるのを見て、この人、お行儀が悪いと思われてしまうよ」

と、言われたことがある。ママにも、

「犬みたいよ。直しなさいよ」

と、言われたことがある。要するに、がつがつと口の中に放り込むのが、犬みたいなんだってさ。だから、私、食べ方には随分と気にしている。でも、お腹が空くと、そんなこと、忘れてしまう。食欲には勝てないというわけ。

それが、ドジだというわけ。

「良平、私のこと、嫌いになった？」

「突然、何を言い出すんだ？」

「私の食べるのを見て、私のことを嫌いになったんじゃないかと言ってるんですよ」

めぐみは真剣な表情を浮かべては言った。そんなめぐみの表情は、正に真剣であった。

すると、良平は何も言わない。

「私、友達にデートする時は、レストランとかマクドナルドに行っちゃ駄目だと言われてるの。私の食べ方を見て、私に幻滅するんじゃないかと」

すると、良平は表情を綻ばせては、

「何だ！ そんなことか！ それなら心配ないよ。めぐみの食べっぷり、とても可愛かったよ」

「本当にそう思う？」

「本当だとも」

「よかった」

と、めぐみは胸を撫で下ろした。そして、こう言った。

「じゃ、今度はケーキ屋さんに行きましょう！ 私、美味しいお店、知ってるんだ」

噂が広まる

6 噂が広まる

めぐみに東山学園生のボーイフレンドがいるという噂が、クラスの中で広まり始めた。「めぐみって、東山学園のスポーツマンと付き合ってるんだってさ。人はみかけによらないものね」

とか、

「男なんて、興味ないと言ってたくせに、ちゃっかりしてるわ」

とかだ。

その噂がめぐみに届かないわけではない。花子からは、

「おめでとう。結婚式はいつなの？ 私も招待してね」

と、からかわれてしまう。

<何、考えてるのよ！ 私、まだ17歳よ！ 結婚なんて、するわけないよ！>

でも、本心言えば、良平としたい……。私、高校を卒業したら、幼妻になっちゃおうかな。ご主人様も同い年となる。可愛い夫と妻だな。そんな夫婦、悪くないな。お揃いのブレザーとジーパン履いて、ハイキングとなりゃ、もう最高！

そういえば、明子さん、どうしてるかな。

明子さんの誕生パーティに、婚約発表したのに、婚約相手と仲違い。そして、呆気なく婚約解消してしまった明子さん。親の言いなりで婚約したそうだけど、それではやっぱり無理がある。相手は自分で見付けなくちゃね。そう、私みたいに……。

フフフ……。これ、ちょっと、言い過ぎかな。まだ、私、婚約したわけじゃないのに。それに、17歳という年齢にも問題がある。17歳って、まだ大人に成りきっていない。子供と大人の混ぜこぜみたいな年齢。婚約って、やっぱり大人がすることだよ。そう、そうなんだ！ もっとも、恋は17歳でも出来るけど。

「めぐみ、いいぞ、その調子！」

歓声が聞こえる。今は体育の授業で、バレーボールの試合をしている。めぐみのスパイクが決まったのだ。

「それ！」

花子がトスを上げる。

「えい！」

めぐみの右手がうなった。

ボールはネットを超え、相手のコートに突き刺さった。レシーブしようとする相手の女の子。でも、ボールに届かなかった。

「やった！」

歓声が上がった。

この試合、結局、15対12でめぐみのチームの勝ち。

「めぐみのお陰で勝てたよ」

「めぐみが最高殊勲選手よ」

女の子たちが、次から次へとめぐみに声を掛けて来る。

「たまたま運よくスパイクが決まっただけよ」

と、めぐみは謙遜する。

「めぐみ、最近、乗ってるじゃないの」

親友の花子までがそう言う。

恋してると、人間、見違える程、生き生きするものなのね。という声が聞こえそうな気がする。もっとも、誰もそんなこと、言いはしない。めぐみが勝手にそう思ってるの。恋する乙女さんと……。

めぐみのチームは休憩。地面に腰掛けて、他チームの試合を観戦している。

めぐみは額の汗を拭った。大分、呼吸も落ち着いて来た。

「ねえ、ねえ、あの人、いい気なものね」

という声が、聞こえた。あの声は……。

杉山朋子さんだ。杉山さんって、クラス随一の情報通。杉山さんの情報って、電光石火の如し。

その杉山さんが、私を見やってはそう言った。勿論、私の誤解かもしれない。でも、情報通の杉山さんが言ったことが、気になる。何だろう？ いい気なものねって。私、とても気になった。そして、体育の授業は終わった。

「よう、元気かい！」

そう声を掛けて来た男がいた。

めぐみは図書室で調べものがあるという花子を遣し、一人で駅にてくてくと向かっていった。駅へと向かう道は、椿学園生たちの姿がちらほら見えた。四時を過ぎると、通行人たちの数も増えて来る。そして、そんな中で、突如、この男が現われ、めぐみに声をかけたのだ。

「よう、元気かい！」

って。

しかし、めぐみは思い出せなかった。しかし、

「あんた、誰？」

というのも、失礼だと思ったし、そうかといって、知らない男に、「元気よ」と愛想よく答えるのも、レディらしくない。そう、私、そんな軽い女じゃないのよ！

だから、ちょっと勿体振ったりする。

でも、よく見ると、この男、何処かで見たような気がする。しかし、思い出せない。

すると、その男は、
「俺のこと、覚えてないかい？」

と言った。
「ええ」

めぐみは小さな声で答えた。
「西城だよ。西城弘美だよ」

思い出した。永合明子さんの婚約者だった相手だ。でも、今は婚約解消されたと聞いているが.....。

「あっ、思い出したよ」
「そうかい。で、君は内海めぐみっていうんだろ？」

西城が、オールバックにした髪に手を当てては言った。
「何で私のことを知ってるの？」

「だから、明子の誕生パーティの時に知ったのさ」
＜私って、そんなに目立ってたかしら。あの誕生パーティには、クラスの可愛い子ちゃんたちが結構いた。その中で私のことを.....＞　　そう思うと、めぐみはちょっぴり嬉しかった。

「明子さんとの婚約、解消なさったのですって？」

めぐみは言った。
「ああ。明子とは、元々気が合わなかったのさ」

「明子さんのような素敵な人、そう何人もいませんわ」
「いいのさ。明子なんて、世間知らずの我儘娘さ。俺には向いてないんだよ」

「ところで西城さん。私に何の用ですか？」
「実は、明子の誕生パーティで、君のことを初めて眼にして、俺.....。つまり、.....、君に参ってしまったのさ」
「はっ？」

めぐみは啞然とした表情を浮かべた。
今まで人を好きになったことはあった。でも、好きになられたことなんて、あるかしら。こんなこと言われたの、初めての経験だ。

勿論、私、容姿は人並み以上だとは思っている。街を歩いていて、男の子たちの熱い視線を感じたことがないわけでもない（自惚れかな）。

でも、正直言って、好きだとか参ってしまったなんて、言われたことはない。これも、中学からずっと女だけの学校に通って来た為に、男の子と知り合う機会が少なかったことも一因してると思う。いくら私が可愛くても、周りに男の子がいなくてはね。と、私は勝手に思っていた。でも、いつか、こういう風に言われたいという願望は持っていた。

でも、私、そう言われるのなら、好きな人に言ってもらいたいと思っていた。私が好きで、相手も好きなら、これで恋愛が成立というわけ。つまり、「めぐみ、好きだよ」と言われるのなら、良平に言ってもらいたかった。

でも、まさか、西城さんに言われるなんて、思ってもみなかった。この人、明子さんの誕生パーティで初めて見た時、あまりいい印象を受けなかった。誰だって、一眼見た時、この人とは相性が合わないピンと来ることもある。西城さんとは、私にとって、そう

いった人だったの。

「要するに、君のこと、好きになってしまったんだ」

西城は、躊躇うことなく、そう言った。

「待ってください。そんなこと、急に言われても……」

「俺のこと、嫌いかい？」

西城は、にやにやしながら言った。

〈馬鹿！ 西城さん！ そういうことを言う時は、もっと真剣な顔をして言ってよ！〉

と、めぐみは思ったが、勿論そんなことは、口には出さない。

「好きも嫌いも、私、西城さんのことは、全然知らないのです」

「そうかい。それも、そうだな。アハハ！」

と、西城は、さも豪快に笑った。そして、

「近くに車、停めてあるんだ。乗らないかい？」

〈危ない！ 危ない！ こういう人について行けば、何をされるか分からないよ〉

「すいません。私、今日は都合悪いので」

「そうかい。じゃ、また誘うよ。悪かったな」

西城はそう言うと、めぐみの許から去って行った。

その西城の後姿を眼にして、めぐみは、

「あの人、なんなの？」

と、呟いたのだった。

失意

7 失意

それから、一週間が過ぎた。また誘うよと言った西城は、その後、めぐみの前に姿を見せていない。もっとも、めぐみは現われない方がよいと思っていたのだが。

毎朝、良平とは、「恋の通学電車」とでも言おうかな。正に楽しい一時を過ごさせてもらってます。ご心配なく！ それと、あの体育の授業の時に、杉山朋子さんが言った気になる言葉のことも、すっかりと忘れてしまっていたのです。

ところが、その杉山さんの言ったことの意味が分かる時が来てしまったのです。

その日は、午後の最初の授業は休みとなった。それで、本当なら、自習しなければならぬんだけど、教室の中は至る所で、女のお喋りの輪が広がっていた。机の上には、ちゃんと教科書とかノートが置かれているんだけど、それは置かれてるだけで、仲良しグループの女の子たちが集まって、お喋りに花を咲かせているのだ。

「めぐみ、あの人たち、めぐみの噂をしてるよ」

と言ったのは、秋田道子だった。

「噂？」

めぐみは、花子とのお喋りを中断しては言った。

「そうよ、めぐみの噂よ」

道子は杉山朋子たちの方に眼をやった。すると、朋子と数人の女の子が、教室の隅に集まって、何やら話してるみたいだ。

「つい、聞こえてしまったの」

と、道子は言った。道子の席は、杉山朋子の席の近くだったのだ。

「聞こえてしまった？ 何を？」

めぐみは訊いた。

「杉山さんが言ったのよ。めぐみのことを『あの人、いい気なものね』と言ってるのを」

めぐみは思い出した。体育の授業の時に、朋子がそう言ったことを。しかし、めぐみには、その言葉の意味が分からない。でも、今、そう言われると、気になるよ。

「ねえ。道子。私、その言葉の意味が分からないよ！」

「……」

そうめぐみが言っても、道子は何も言わない。

それで、めぐみは改めて、そう言った。

すると、道子は、

「めぐみは知らない方がいいかもしれないよ」

と、殊勝な表情を浮かべては言った。

「いいのよ。そんなこと、気にしなくたって。教えてよ。話の続きを」

「仕方ないわね。めぐみは、東山学園の男の子と付き合ってると言ってたでしょ」

「うん」

めぐみは肯いた。良平のことが、頭に浮かんだのだ。

すると、道子は眼を大きく見開き、

「実はね。そのボーイフレンドには、ガールフレンドがいるのよ」

〈まさか！　良平は、私だけのものと思っていた。その良平に、ガールフレンドがいるなんて！〉

めぐみはショックで血の気が引いた。

〈そんなの嘘よ！〉

めぐみは心の中で叫んだ。

「杉山さんが言うには、めぐみが付き合ってるその東山学園生は、そのガールフレンドが本命らしいのよ。それを知らないで、浮かれてるめぐみのことを『いい気なものね』と、陰で笑ってるのよ」

めぐみは信じられなかった。良平にガールフレンドがいたなんて！　勿論、良平と付き合うようになって、まだそれ程日が経ったわけではない。良平のことをずっと前から知っていたわけではない。私以外のガールフレンドが、一人か二人位いても不思議ではない。

でも、そのことは、めぐみにとって、あってはならないことなのだ。そう！　良平のガールフレンドは、私だけなのだ。私以外の女なんて、良平には必要ないんだ！

〈こうなれば、良平に本当のことを訊くだけさ〉

と、めぐみは力強く肯いたのだった。

薄明かり

8 薄明かり

最近、どういうわけか、ホームで良平の姿を見掛けない。いつも、決まった時刻の電車に乗って通学していたのに……。それに、この前の日曜日に電話したのだけど、良平のママに「外出しています」と言われてしまった。夜の九時に電話したのに、外出してるなんて、おかしいと思う。高校生が夜の九時にいないなんて……。

そのことが、ホームで見掛けないことと重なって、めぐみの心を一層不安にした。

「最近、柴田君、見掛けないね」

と、花子にも言われてしまった。

「うん」

めぐみも元気のない返事をした。

本当は、花子はめぐみと一緒に電車通学してたのだけど、めぐみと良平の邪魔をしない為に、わざわざめぐみたちとは違う車両に乗って通学することになったのだ。

「花子、気を利かせてくれて、ありがとう」

「友達じゃん！」

と、花子は軽く笑った。そんな花子のことを、いい友達を持って幸せと、めぐみは思ったものだった。でも、その花子の心配そうな声を聞いて、めぐみはますます元気が無くなりそう。

何しろ、ここ三週間程、良平と連絡が取れてないのだから。

「先に帰ってね」

めぐみは花子に言った。

めぐみは花子が駅舎に入っていくのを見送った。そして、めぐみは東山学園に向かった。

〈久しぶりだな。ここに来るのも〉

めぐみは初めて良平のことを待っていた時のことを思い出した。そして、めぐみは連絡の取れない良平を東山学園の近くで待ち伏せしようとしたのだ。

そして、さほど時間を経ずに、良平は校門から出て来た。

「良平！」

めぐみは、良平に駆け寄った。

「めぐみ……」

良平は呟くように言った。

めぐみは、そんな良平の顔を見て、表情が曇った。良平が、めぐみのことを迷惑だと言わんばかりの顔つきをしたからだ。それで、めぐみの言葉は詰まった。

そんなめぐみに、良平は、
「こんな所で、何してるの？」

と、素っ気なく言った。
「友達がこっちの方に住んでいて、ちょっと寄ってみたんだ」

めぐみは嘘をついた。
「そう……」

良平の言葉は、実に素っ気ないものだった。
良平は歩き出す。めぐみは良平に歩調を合わせる。

「ねえ。良平。最近、電車で会わないじゃん」
「そういえば、そうだな」
「時間、変えたの？」
「変えてないさ」
「本当？」
「本当さ」

めぐみは、それ以上、突っ込めなかった。
何故って？ しつこい女と思われたくなかったから。「私以外の女の子と付き合ってるの？」と訊きたかったが、この日の良平には、訊ける雰囲気じゃなかった。そんなこと訊いて「いるさ」と言われてしまえば、私と良平との関係は終わってしまいそう。

私は杉山さんが言ったように、浮かれていただけなのだろうか？ この良平の私に対する余所余所しさは、きっと私のことを避けようとしてるんだ。私と良平との関係は、プラトニックの関係。キスもしたことない。何処かの雑誌で見たことがある。身体を与えないと、男の子は逃げて行くよ、と。

そんなこと、めぐみは信じてなかったが、少しは気にかけていた。私がキスもさせないから、私から逃げて行ったのかしら。この前のデートの時に、海岸で良平がキスをしようとして来た。でも、私、断った。まだダメよと。その時のことを覚えている。突如、不快そうな顔付きになったんだもの。でも、良平はそんなことで、私と付き合っていたとは思えない。良平って、そんな人じゃない。でも、良平は私を捨てようとしてる。
「悪いけど、寄るところがあるんだ」

と、良平は言った。
「そう……」

良平は駅舎に消えて行った。
めぐみは、ただぼんやりと、そんな良平の後ろ姿を見詰めていた……。

翌朝、めぐみはホームで良平を探した。
この辺りは新興住宅街だけあって、最近は人口がめっきりと増えて来た。その所為で朝の電車は、通勤者と通学者で一杯。ホームも人で溢れてる。その中で良平を見付けた。だって、いつも同じ電車の同じ車両に乗って来るんだもの。勿論、めぐみも同じ電車の同じ車両に乗る。だから、良平のことを知ったわけ。

良平は乗る電車を変えてないという。

めぐみは腕時計を見た。七時四十分。確かに時間通りだ。でも、良平は見当らない。

「おかしいな。こんな筈じゃ……」

めぐみは、いつも乗る二両目のホームの周辺を探してみたが、やはり良平は見当らない。

めぐみはホームを歩き出した。少しずつ歩き出した。ホームの周辺の人たちに眼をやりながら、ホームの端の方まで歩いて行くと、その端の方に良平がいた。

確かに、同じ電車に乗ろうとしてる。でも、ホームでの乗り場所を変えていたのだ。

これは、めぐみは想像もしてなかった。今まではホームの同じ場所で顔を合わせ、同じ電車に乗っていた。しかし、良平はホームで乗る場所を変えた。これじゃ、会わない筈だ！

七時四十五分になった。電車がホームに入って来た。

良平は電車に乗った。めぐみは、電車に乗らずに、ぼんやりと良平の後ろ姿を見送っていた……。

その夜、良平から電話があった。今度の日曜日に海に行かないかという誘いだった。

めぐみは承諾した。今までつかえていた蟠りが一気に晴れた思いだった。

「やっぱり、良平は私が本命なのよ。私のこと、一番大切に思ってるのよ」

めぐみは鏡に写った自分自身を見詰めては、笑ってみせた。「フフフ」めぐみは、まるで夢心地の気分だった。

翌日からは、めぐみは少し早目の電車に乗った。良平は以前と同じ電車に乗っている。七時四十五分発の。でも、最後尾の車両に乗っている。めぐみが前から二両目の車両に乗るっていうのに……。

でも、このことは、深く考えないことにする。めぐみは思い切って、七時三十五分発の電車に乗ることにした。

「ねえ、ねえ、花子。今度の日曜日に良平にデートに誘われたの」

めぐみは花子に言った。

「よかったね。めぐみ」

「うん」

「めぐみ、最近元気がないから、気にしてたのよ」

「そうかな」

めぐみは元気一杯のつもりだったが、傍目からはそう見えたのかもしれない。

「あの噂のこと、気にしなくてもいいよ。どうせ出鱈目だから」

「うん」

めぐみも肯いた。

「杉山さん、確かに情報通だけど、間違った情報を流すこともあるよ」

と、花子はまくしたてた。

「で、良平君に確認した？ 女のことを？」

「ううん」

めぐみは、やはり訊けなかった。勇気がなかったのだ。

「そう……。でも、気にすることないよ。デートに誘われたとなれば、めぐみが本命ね」

「そう言ってくれと、嬉しいな」

めぐみはちょっぴり自信がついた気がした。

おっと、いけない！ 昼休みは刻一刻と過ぎて行く。

二人は急いでご飯を口の中に運んだのだった。

事の終わり

9 事の終わり

その電話が掛かって来たのは、土曜の夕方だった。

「めぐみ、柴田さんからよ」

とママに言われた時、めぐみの心は躍った。

〈何の話かな〉

めぐみは、ママから送受器を受け取ると、

「めぐみですが」

と、甘い声を出した。

そして、少しの間、めぐみは良平と他愛ない話をしたのだが、やがて、
「分かったわ。明日の十時ね」

そう言うと、めぐみは送受器を置いた。

〈一体どうして……〉

めぐみの表情は曇った。

今の良平の電話。

明日、友達がどうしても行きたいと言うから、連れて行っていいかいと、めぐみに訊いて来たのだ。

デートというものは、二人きりでするもの。それなのに、どうしてその友達が割り込んで来るの？ 愛し合ってる男と女の楽しい一時。それがデートなのに、友達が来るなんて……。良平って、どうかしてる……。

でも、良平がそう言うなら、仕方ない。誰が来るのか知らないが、良平に任せるしかなかった……。

「何処……、何処にいるの……」

めぐみは辺りを見回した。良平との待ち合わせ場所の駅前広場。日曜日の朝だということで、人は平日より少ない。でも、良平の姿は見付からなかった。

めぐみは腕時計を見た。約束の時間を十分程過ぎてしまった。

〈良平、どうしたんだろう……〉

めぐみは不安な気持ちで、辺りを見回した。

その時、車のクラクションが鳴らされた。「プー、プー」と。

めぐみは気にしなかった。

しかし、その車はめぐみに一層近付き、再び「プー、プー」と、クラクションを鳴らした。

めぐみは車を見た。「うるさいね！」という眼差しで。

する助手席側の窓が開き、

「めぐみ！」

という呼ぶ声がした。

それで、めぐみは声の主を見やった。

「良平だ！」

車窓から、良平が手を振った。

それで、めぐみは表情を綻ばせては、車に近付いた。めぐみは良平に会えて嬉しかった。でも、不安だった。〈誰と来たの？〉

「乗れよ」

良平は言った。

そして、後部座席側のドアが開いた。

めぐみは車に乗り込むと、その途端、驚きの表情を浮かべた。

〈明子さん！〉

後部座席には、何と永合明子が乗っていたのだ！ 真っ赤なブレザーとスカートをはいて！

「明子じゃないの！」

めぐみは眼を大きく見開いては言った。

が、そんなめぐみの気持ちは不快だった。良平のお友達って、明子だったの……。

「待ったかい？」

助手席に座ってる良平が言った。

「少しだけ」

「道が少し混んでいたんだ」

運転手が言った。

〈あなたは！〉

めぐみは驚きの声を発するところだった。何故なら、運転手は何と、西城弘美だったからだ！ これは、一体どういうことなの……。良平と二人でデートする筈だったのに、それが永合明子さんと西城弘美さんが来るなんて……。

「驚かせてごめんね」

明子は、些か済まなそうに言った。

「ううん」

と、めぐみは頭を振ったものの、でも、本当はとても驚いたの。

「お二人のデート、邪魔しちゃって」

明子は軽く笑った。

「……」

「こいつ、意地悪な女だろ」

西城は、運転しながら言った。

「意地悪な男は、あなたでしょ」

明子は言い返した。

「まあ、まあ、喧嘩はよししょう」

と、良平は言った。めぐみは、何だか狐につままれたみたいだ。良平とのデートの筈が、婚約者だった明子さんと西城さんが喧嘩をしてる。

「良平、説明してよ」

めぐみは、堪らず言った。

「ああ。つまりその……」

良平は、言いにくそうだった。

「俺が言ってやろうか」

西城が言った。

「いいえ。私が言うわ」

と、明子が口を挟んだ。

〈止めて！ 聞きたくない！ 後が怖い！〉

めぐみは耳に手を当ててしまった。

そんなめぐみに構わず、明子は、

「めぐみ……。めぐみには悪いけど、私と良平は、ずっと前から付き合っていたのよ。そう、ずっと前からなのよ」

〈やっぱり、聞かなきゃよかった。私なんて、明子さんに勝てるわけがない！ 良平が……。良平が明子さんのものになる……。〉

「そうなの」

でも、めぐみはさりげなく言った。

「私、良平と久し振りにデートしようと思って良平を誘ったの。ところが、良平はめぐみをデートに誘ったというじゃないの。それなら、私、遠慮するわと言ったのよ。本当よ」

と、明子は軽く笑った。

「でも、良平が言うのよ。三人でデートしようよと。私はめぐみに悪いよと言ったんだけど、良平が承知しなかったのよ」

めぐみはシートにもたれてる良平の後ろ姿を見た。良平、どんな顔をしてるのだろう。めぐみは、良平の顔が見たかった。

「で、良平は、男一人増やせばいいじゃないかと、言ったのよ」

最低！ 明子が言ったことが、まるで鞭のように、めぐみの心を打ちつけた。

「私との婚約を解消した西城さん。以前、内海めぐみっていう娘、気に入ったぜと、あの娘も俺に気がありそうだと、私に言ったことがあるのよ。それで、私、閃いたのよ。西城さんも連れて行こうと。そしたら、良平は、

『それはいいな』と言ったのよ」

と、明子は立て続けに流暢な口調で言った。

そんな明子の話を、めぐみはただ車窓から流れ行く景色に眼をやりながら、虚ろな表情を浮かべながら、聞くばかりであった。

すると、西城が、

「明子が言ったように、めぐみちゃんは可愛いよ。俺、本当にそう思ってるのさ」

と、にやにやした。

すると、良平が、
「そういう話はこれで終わりにしようよ。今日は愉しくやりましょう」
と、口を挟んだ。そして、
「音楽、つけていいですか？」
「いいよ」
西城がそう言ったので、良平はスイッチを押した。
すると、小気味良いポップスが流れて来た。
「もうすぐだぜ」
西城はアクセルを強く踏んだ。車はぐんぐんとスピードを上げ、バイパスを突っ走る。
「やった！ やっと海が見えて来たよ」
前方には、コバルト色の海が広がっていた。
車は、ビーチラインと呼ばれる海沿いの道を突っ走っていた。良平は窓を開けた。すると、心地良い海風が車内に流れ込んで来た。
それで、西城はパワーウィンドウで、後部座席の窓も開けた。すると、更に心地良い海風が車内に流れ込んで来た。
「キャー！ 素敵！」
明子は叫び声を上げた。そして、
「西城さん、何処かで車を停めてよ」
「待ってるよ。後少しでパーキングさ」
西城は車のスピードを緩めることなく、ぶっ飛ばした。めぐみは、コバルト色の海に眼をやった。そんな海は、とても力強く感じられた。それは、落ち込んでいためぐみの気持ちを吹き飛ばすかのようであった。
間もなく車はパーキングに停まった。
すると、明子が真っ先に車から降りた。そして、
「海って、素敵ね」
と、はしゃぎ回った。
だが、めぐみを見やっては、
「めぐみ、どうしたの？ 元気ないじゃないの」
「ううん。そんなことはないよ」
「さ、皆さん！ 浜に降りようぜ！」
西城は、パーキングから、浜に降りる石段を降り始めた。そして、良平と明子が続いた。
「明子さん、どうぞ」
と、良平は明子の手を取っては、石段を降りて行った。めぐみはそんな二人の様を寂しげな眼差しで見やっていた。
めぐみは、ぼつんと立っては、石段を降りようとはしないので、良平がめぐみの許に来ては、めぐみの手を取ろうとしたのだが、めぐみは、そんな良平の手を払い除け、
「大丈夫よ。自分で降りるから」
「そうかい」
砂浜の二十メートル程先が、波打ち際であった。

明子といえば、早々と波打ち際に行っては、波と戯れていた。そんな明子の様を、めぐみは見詰めていた。そう！ 私たち椿学園3年A組の女生徒たちは、皆、憧れの気持ちを込めて、明子を見てたんだっけ。

良平が、明子と手を取り合い、波打ち際でふざけ合っている。

明子の「キャッ！ キャッ！」という声が、よく響く。

〈明子、あなただったのね。良平のボーイフレンドって……。明子が私のボーイフレンドを奪ったんじゃない！ 私が勝手に割り込んだだけなんだ。良平と明子の間に……。

この二人には、勝てそうもない。でも……、でも……、良平は私だけのものであって欲しい……〉

「おい、何をぼーっとしてるんだ」

西城はめぐみの肩に手を置いた。

「ううん。何でもないよ」

と、めぐみは笑って見せた。

「妬いてるんだな。あいつらに」

「……」

めぐみは何も言わない。

「何処がいいんだ。あいつが」

と、西城は良平を見やりながら、渋面顔で言った。

「スポーツマンか何なのか知らないが、あいつは明子にメロメロなんだ。あんな奴のことは、諦めた方がいいぜ！」

「……」

「良平って、ああ見えても、結構プレイボーイなんだぜ。明子以外の女にも手を出したりするのさ。その中の一人が、たまたま君だったというわけさ。だから、俺は君のことが可哀相なんだよ」

「だから、良平のことは、きっぱりと忘れ、俺と付き合ってくれないかな」

西城はオールバックの髪に手を当てながら、めぐみの顔を覗き込んだ。

すると、めぐみは何も言わずに、下を向いた。

「まあ、いい返事を期待してるよ」

西城はそう言うと、砂浜に落ちている流木を拾い集めようとした。浜には、結構流木が落ちていた。

「おい！ 皆！ 木を拾ってくれ！ 木を集めては火を点け焼き芋を食べるんだ」

西城がそう言ったので、めぐみたちは木を拾い始めた。そして、一箇所に集めた。

「よし。これ位集めれば、大丈夫だ。火を点けるぞ！」

西城は、ライターで紙に火を点け、その火はやがて、流木に燃え移った。木がパチパチと音を立てて、燃え始めた。

「待ってな」

西城はそう言うと、車に戻っては、トランクから、さつまいもを取り出し、持って来ては、火の中に入れた。

めぐみたちは、じっと焚火を見詰めては、さつまいもが焼けるのを待った。

「もう大丈夫だろう」

西城はそう言うと、さつまいもを取り出しては、アルミホイルに包み、かぶりついた。
「うめえ。明子もめぐみも良平も、食べるんだ」
そう西城に言われ、明子もめぐみもさつまいもを取り出しては、アルミホイルに包み、口に持って行った。
「美味しい」
めぐみは率直にそう思った。
めぐみは元気を取り戻した。
明子はそんなめぐみを見て、
「やっぱり、食欲は、めぐみに敵わないわ」
と、いかにも感心したように言ったのだった。
そして、四人が焼き芋を食べ終わった頃、
「腹ごしらえもしたし、そろそろ出発するか」
と、西城は言った。
「何処に行くの？」
めぐみは訊いた。
「そうだな。何処にしようか」
西城は腕を組んだ。
「フラワーパークに行きましょう。あそこ、色んな花が咲いていて、とても綺麗な所よ」
と、明子は良平を見て言った。
「そうだな。それもいいな。じゃ、西城さん。それで決まりだ」
良平と明子は、嬉しそうに笑っている。
だが、西城は、
「フラワーパーク？ そんな子供染みた所に行くのかよ」
と、些か不満そうだった。
〈私、もう嫌だ！ これ以上、良平と明子がいちゃついているのを見るのは嫌だ！ 良平はもう私の許に戻って来ない〉
「私、もう帰りたい……」
めぐみがそう言うと、一同にしらけたような雰囲気 flowed。
すると、西城が、
「そうするか！ 焼き芋食って、腹も膨れたことだし」
と、眉を顰めた。
すると、良平が、
「西城さんがそう言うなら、仕方ないな」
と、ちょっぴり残念そう。また、明子も残念そう。
「よし。車に戻ることにするか」
帰りは明子が助手席に座り、めぐみと良平は、後部座席となった。
車が走り出すと、西城はぐんぐんとスピードを上げ、次から次へと車を追い越して行った。そして、やがて、バイパスから高速道路に入った。
すると、西城は一気にアクセルを強く踏んだ。
めぐみと良平は、一言も口をきかなかった。

そして、いつの間にやら、陽が翳り、いつの間にか、街中に入り、やがて、西城が、
「さあ、着いたぞ！」

その西城の声に、うとうとしていためぐみは、我に還った。駅前に着いたのだ。時間はもう七時前だった。

西城は車を手頃な所に停めると、
「今日はお疲れ様。これで、解散しようぜ」

そう西城に言われ、三人は車外に出た。そして、西城の車を見送った。
「お疲れ様。楽しかったわ」

と、明子はめぐみに微笑した。
「本当ね」

と、めぐみも微かに笑った。本当は、ちっとも愉しくなかったのだけれど。
すると、良平が、
「めぐみ」

と、めぐみを見やっては言った。
「何？」

めぐみは訊いた。
すると、良平はショルダーバッグから白い封筒を取り出し、
「これを」

と、めぐみに差し出した。
「何、これ？」
「読んでみてくれよ。じゃ、これで」

そう言うと、良平は明子と共にめぐみの許から去って行った。
めぐみはそんな二人の後ろ姿を、さも羨ましげに眺めていた。そして、封筒をバッグの中に仕舞った。

めぐみは家に戻ると、早速良平から受け取った封筒の中に入っていた手紙を読んでみることにした。

〈今日はめぐみとの最後のデートにしようと思っていたのだけれど、とんだ飛び入りが入ってしまい、申し訳なかった。短い期間だったけど、めぐみと付き合って、結構楽しかったよ。でも、今日でお別れだ。バイバイ 良平〉

と、書かれていた。
めぐみはこの手紙を読み終えると、ぎゅっと、握り潰したのだった。

エピローグ

エピローグ

「電車が入ります。気をつけてください」

駅員の声が、ホームに響き渡った。

「間に合ってよかった」

めぐみがそう思ったのも束の間、電車の中に滑り込む。電車は、相変わらず、超満員。

電車は、程なく滑るように、動き出す。それと同時に、めぐみはホームに眼をやった。

「いい男、いないかな」

良平からの手紙を受け取って以来、一度も良平を眼にしていない。何故なら、めぐみは今までより十分早い電車に乗るようにしたのだから。

そんなめぐみは、

〈男なんて、いくらでもいるさ〉

と、開き直っていた。

〈私、まだ十七歳よ。若いんだから。良平の替わりなんて、絶対に見付けてやるから〉

と、自らに言い聞かせていた。

でも、遠ざかって行くホームを眺めては、めぐみの眼は良平を探していた……。

〈終わり〉

この作品はフィクションです。実在する人物、団体等とは一切関係ありません。

ときめき通学電車

著 広田弦一

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
